

快活と諦念と

ロバート・ダレッシオ予備役海軍少佐のこと

午睡から覚めたとき、窓越しにその人が昂然と遠く川面を眺めやっているのが見えた。昼下がりを大分に過ぎたその時刻でも熱帯の陽光は依然として強く、バルコンのすぐ先に咲く真紅の花々を行き来するハチドリの微かな羽音が南国のけだるさを増しているようだった。プールやバーベキューコテージなどがある広い庭先につづくスリナム河が、ボーキサイト鉱を多量に含んだ赤茶けた水を滔々と運んでゆく有様、熱帯雨林の大河のどこまでも冗漫なその流れを、そのときあの人はどんな思いで飽かず見つめていたのだろう。

ボブと呼ぶその人のこと、あの時々のことを今でも懐かしく思い出す。快活で明朗で親切に溢れ、エネルギーに仕事を進めてゆく素晴らしいビジネスマンだった。休日にはガーデニングに精出し、沢山の蘭の栽培も人手を使わずに上手にしていた。南米熱帯雨林地帯の名も知れぬ小国で進められていた米日韓合併事業に、米国側の経営責任者としてサンフランシスコに本社をおくコングロマリットから派遣されてきていた彼は、スタンフォードMBAを持ってアメリカンビジネスのキャリアを積んだエリート、当時まだ駆け出しのビジネスマンだった僕には眩しいキャリアの人だった。ボブはそしてあの長く続いた遠いベトナムでの戦争に志願して従軍した予備役の海軍少佐でもあった。一回り以上も年下の、それでも日本側Repとしてその事業に送りこまれていた僕に、ボブは終始良くしてくれ、飛行機で1時間半ほどの国境を越えた隣国に駐在し、月に一度は経営のうちあわせのため出張していた僕に、スリナム河畔の彼の借りていた広大な邸宅の一室をいつでも宿舎として使うように鍵をわたしてくれていた。あの白い熱帯風の屋敷に彼はボーイフレンドのマイクと2人で暮らしていた。マイクは多分フィリピン系であったらと思うけれど、仕事らしい仕事は全くせずに、どこまでも気のいい善意の固まりのような気まぐれでわがままな人だった。ホモセクシャルの2人と僕はそうしてあの旧植民地の小国で2年余りの間折々を共に過ごしたのだった。

知識も豊富、判断にも優れ、志操高く勤勉精励で誰にもやさしいボブに、所謂国際ビジネスの要諦のようなものも随分と教えてもらったような気がする。ある時彼の本社が他の企業グループを買収するという経営決議があって、そのことが米国時間翌日のウォールストリートJに載るから今日中に東京の本社にその旨発信しておいたらと耳打ちしてくれて、首席駐在員たる僕の面目が立つように心遣いをしてくれたこともあった。僕達の合併事業はその後次第に成算が立たなくなり、それぞれの本社の関心も薄れ勝ちになっていったのだが、それは却って僕達に余剰の時間を与えることにもなり、あの頃僕達はあのスリナムのボブの家で、庭先やコテージの籐の椅子に腰掛けて終日い

ろいろなことを話したのだった。そんな中で僕はボブがみずから進んでこの小国の事業に赴任してきたことを知った。彼のキャリアや素晴らしい能力からしてあの頃のアメリカンビジネスのトップフロントにもっといくらかでもキャリアアップのチャンスはあるだろうことは容易に想像できたことだった。彼の人物は若い僕には好奇と憧憬の対象であったのかもしれない。

音楽だって、マイクはレゲエだかとにかくジャンクだったけれど、ふとしてマイクが外出している時など、ボブはよくワーグナーを聴いていたのを知っている。マイクが取り乱して下品な言葉を使ったりするとボブはいつも冷静に丁寧に諫め諭していた。そして彼が従軍したベトナム戦争。ガンシップの艇長だったボブが参加したメコンデルタでの掃討作戦のことはすこしだけ聞いたことがある。遊弋するボブの艇と対岸を進む韓国軍とのラインが遭遇した敵、止まずつづいた豪雨の中の激戦、交錯する火襖。その時ボブは何を叫んだのだろう。その時もボブは優秀な指揮官であったに違いないし彼の力と頭脳はきっと部下を鼓舞し状況を切り開いたのだろうが、あの戦争の記憶はあの頃のボブの心になにを残していたのだろう。あの晩、彼の話に僕は一切何も訊ね返さなかったと思うが、その時の彼の遠い瞳を良く覚えている。

アメリカンクラブやオランダ系クラブによく連れて行ってもらった。アルミや電力など、それでもあんなところにも一定の白人コロニーのようなものはあって、悲惨なくらい長い退屈な時間をそうした事業に勤務する夫とともに過ごす婦人達があるのだ。クラブのテラスにボブが顔を出すと決まって幾人かのそうした婦人が声をかける。そんな時ひとりずつに丁寧に素晴らしい笑顔で「お元気ですか、ずっとあなたのことを考えていましたよ」のような返答をボブは自然にできる人だった。ハローウィンのパーティーの時には皆すこしふざけた仮装をしたりする。だらしなく酔ってふざけた格好をした人達の中でボブは米海軍の純白の第2種軍装で出たことがあった。猥雑な音楽の後でふとワルツがかかった時、肥満した酔った婦人の求めに応じてつぎからつぎの相手に、ステップを乱すことなく丁寧にそしてやさしく楽し気に踊ってあげていた。

庭園の緑のローンと真っ白な士官制服、そしてその向こうに滔々と流れていた赤茶色のスリナム河。あの時々とその人のことを今でも懐かしく思い出す。

社長になりたいと思っていますと臆することもなく語る商社の青年に出会いました。僕達のあの時代には無かったかもしれない健康過ぎるまっさらの上昇志向に、すこし戸惑うものを感じました。およそ人生の達成とか到達とは何なののでしょうか。歴史や事業、そして人生での大事。それを成し遂げるための熱情や知性や努力の放出。そうした全ての前進的上昇のエネルギーは、人間の中の諦念や虚無ということと意外にも表裏をなす極く近い事象なのではないかなどと考えてみる必要があります。

(デンマーク農業理事会駐日代表 小野澤鉄彦・おのざわてつひこ)